

鳥取平野における水田稲作開始期の 年代学的調査

弥生前期中頃の突帯文土器

Chronological Research of the Initiation of Rice Cultivation in the Tottori Plain: Tottaimon
Pottery in the Middle of the Early Yayoi Period

FUJIO Shin'ichiro, HAMADA Tatsuhiko and SAKAMOTO Minoru

藤尾慎一郎・濱田竜彦・坂本 稔

I 調査の概要

2011年5月25日、藤尾は鳥取県教育文化財団の濱田竜彦と協議のうえ、鳥取市本高弓ノ木遺跡^{もとだかゆみのき}の調査によって出土した縄文晩期末～弥生前期中頃に比定された、弥生化していない突帯文土器と遠賀川系の如意状口縁甕に付着した炭化物20点を採取した。

そのうち18点をAMS-炭素14年代測定したところ、前7世紀前葉と前7世紀後半～前6世紀前半を中心とする時期に比定できる土器群であることがわかった。

弥生前期中頃といえば、福岡平野では板付Ⅱa式の段階にあたり、いわゆる炭素14年代の2400年問題といわれる、較正年代を絞り込めない時期に相当する。したがって通常、測定値だけでは、約300年ぐらいの時間幅までしか絞り込むことができない。本遺跡の土器は、河川内の出土で、層位的に2つに分けて取り上げられたが、層位の違いによる型式学的な有意性を認めることはできなかった。よって型式学的な古新の差を根拠に板付Ⅱa式の存続期間に相当する時期を、前7世紀前葉～後葉を中心とする時期と前7世紀末葉～前6世紀中ごろを中心とする時期の2つに分けた。

これにより、鳥取平野における弥生稲作の開始年代を前7世紀代に絞ることができた。

本調査は、国立歴史民俗博物館基幹研究「農耕社会の成立と展開」(2009～2011年度、藤尾研究代表)の一環として重点配分の経費補助を受けて行った。なお、炭素14年代測定と同位体分析に関わる部分は坂本稔が行った。執筆は、藤尾と濱田が協議の上で行ったが、土器の型式認定は濱田案にしたがい、広域編年観については両論併記とした(藤尾・濱田)。

II 測定した遺跡の概要と土器の考古学的特徴

1 遺跡の概要

本高弓ノ木遺跡は、中国山地に端を發して北流する千代川に合流する有富川の北岸に広がる谷底平野に立地し、標高は8～9mを測る。縄文時代から近世にいたる複合遺跡である[濱田ほか2012]。2009～2010年度の発掘調査で縄文晩期末～弥生前期中頃に埋没した河川が検出され、突帯文土器や遠賀川系土器が多数出土した。土器にはイネ、アワ、キビの種実圧痕が多数見つかつて

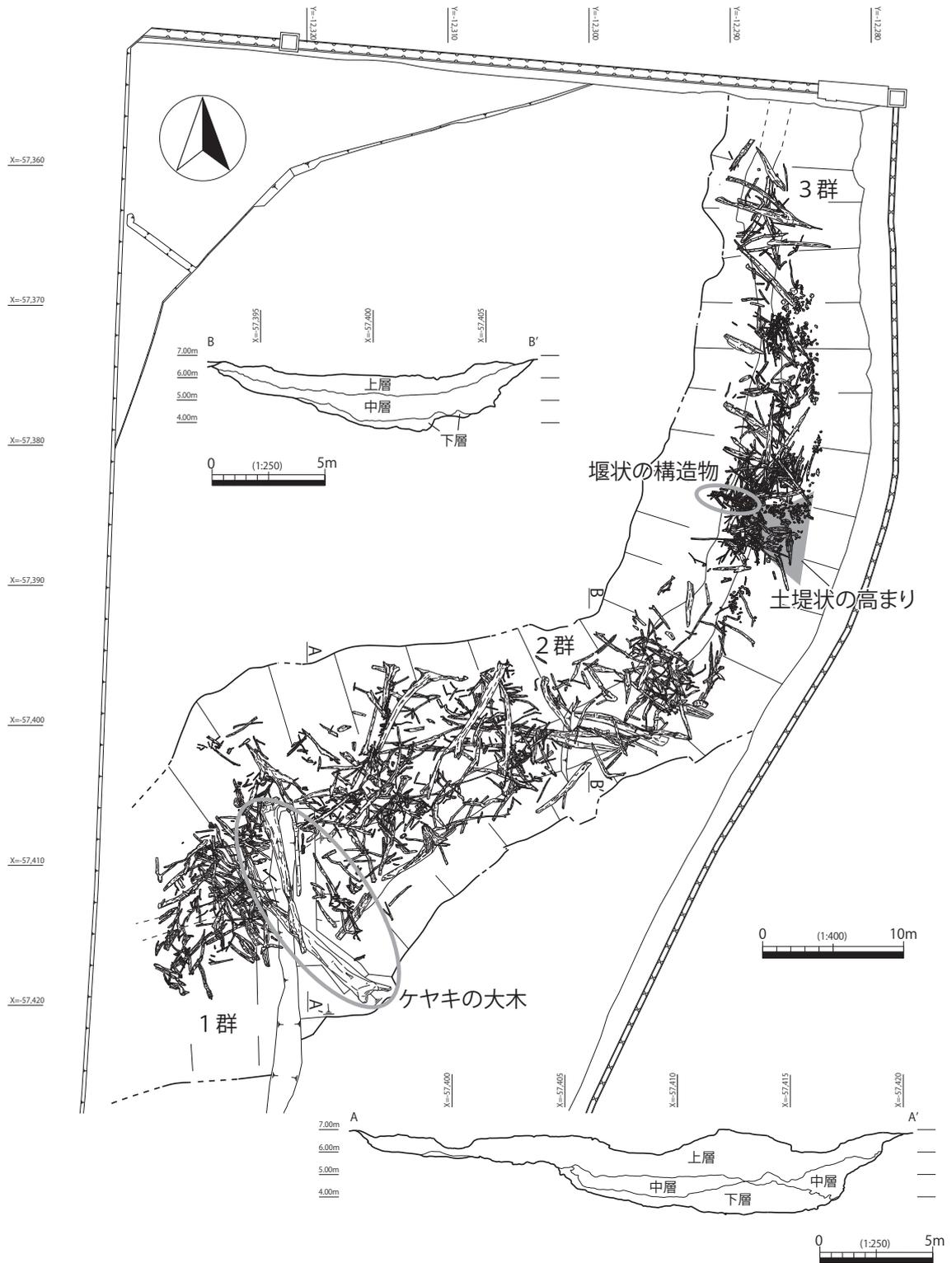


図1 本高弓ノ木遺跡 710 溝 (河川跡) ([濱田ほか 2012] より転載)

おり、鳥取平野における弥生稲作開始期の様相を語るうえで重要な遺跡の1つである。

2 河川 (図1)

川幅は最大20m、深さは検出面から3.5mを測る。河川を埋める砂層の上・中層から多量の木材に伴って突帯文土器や遠賀川系土器が出土した。水量や水流の調節を目的に設置されたとみられる堰状の構造物も存在した。出土した木材は堰状の構造物に関わるものを除くと、伐採、分割した木材を貯蔵したり、廃材が集積されたものと考えられる。このほか、鋏、斧柄の未製品、横槌、木製農具の未製品、二脚盤なども見つかっている。

3 河川出土土器 (図2)

突帯文土器と遠賀川系土器が出土した。突帯文土器には、砲弾型の一条突帯文甕を標識とする古海式ふるみに相当するものがもっとも多い。古海式は縄文晩期末に中国地方の山陰側に展開する突帯文土器で、山陽側の沢田式に後出し、近畿の長原式に併行する〔濱田2008〕。板付Ⅱa式と併行関係にあると考えられるが、古海式の標識となっている古海遺跡の土器群には遠賀川系土器が伴わない〔平川1981〕。遠賀川系土器には、口頸部や頸胴部の境界に段をもつ壺や、少条沈線をもつ如意状口縁甕がある。これらは山陰地方の土器編年第Ⅰ-2様式に相当し〔松本1992〕、現状では鳥取平野で古い特徴をもつ遠賀川系土器である。板付Ⅱa式の範疇にあり、古海式を主体とする突帯文土器との共伴関係には矛盾がない。器種構成は遠賀川系土器の基本となる器種は壺である。如意状口縁甕はわずかで、突帯文土器の甕が基本となる。

またレプリカ法によって突帯文土器からイネ、アワ、キビの圧痕が見つかっている。河川からは木製鋏が出土しており、これらが栽培されていたことは確実である。問題は、それがいつの時期なのかを調べるために、付着土器炭化物のAMS-炭素14年代測定を行った(濱田)。

Ⅲ 試料の採取

資料は20個体の土器から21サンプル採取した。内訳は如意状口縁甕3、浅鉢3、突帯文土器甕14、粗製深鉢1である。このうち測定値を得ることができたのは18点である(表1)。なかでも、沈線をもたない如意状口縁甕と、二条沈線をもつ如意状口縁甕の測定値を得られなかったことはきわめて残念であった。

サンプリングは、濱田の分類案にしたがって、遠賀川系、浅鉢、古海式の順に藤尾が行った。

① 埋土中層から出土した1条沈線をもつ如意状口縁甕である(図2-①、図3-①)。口唇部刻目は間隔を空けて、全面を浅く細く刻む。沈線下の胴部外面に横方向の刷毛目をもつ。第Ⅰ-2様式のなかで理解できる甕である。最近、この時期の資料が増加しており、第Ⅰ-2様式は板付Ⅱa式の古・新と対応する細分が可能となってきた〔濱田2012〕。この甕は板付Ⅱa式新に併行する蓋然性が高い。この資料は第Ⅰ-2様式の新相(〔濱田2012〕の様相4・5)に相当する。沈線下の胴部外面に付着していたススを試料とした。

② 埋土中層から出土した浅鉢である。大型で胴部が「く」の字状に屈曲する(図2-②、図3-②)。接合線で割れている。山陽地方の沢田式、山陰地方の古市河原田式に典型的な形態をしており、

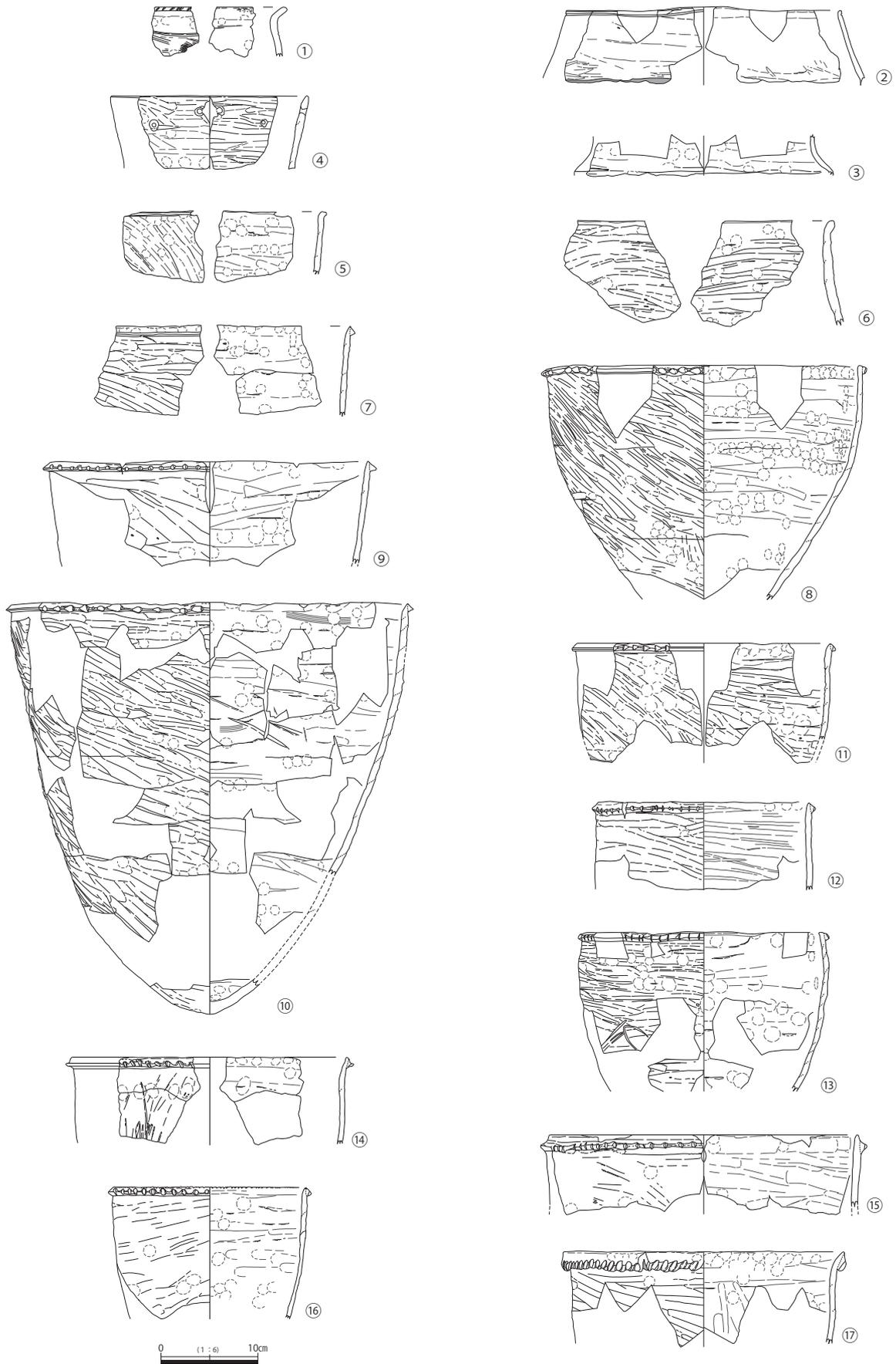


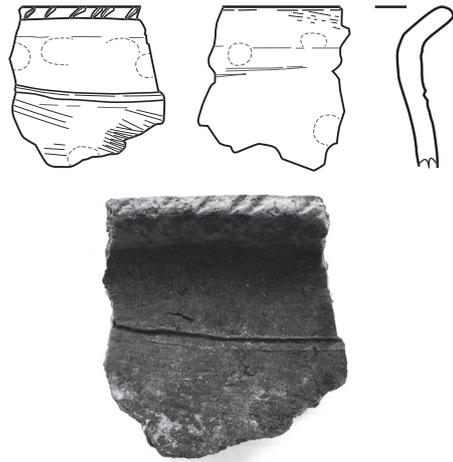
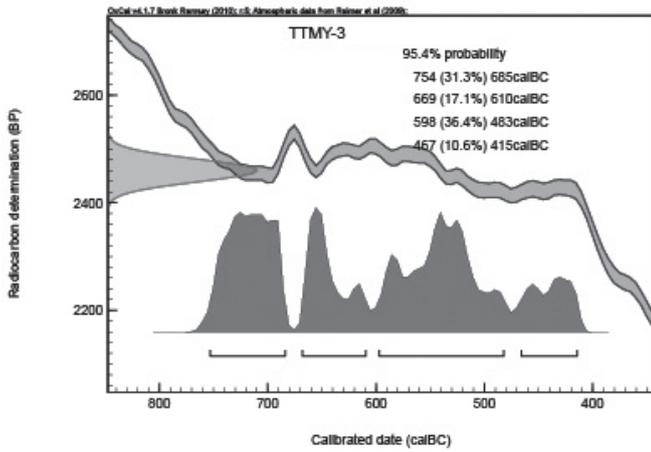
図2 炭素14年代測定を行った土器の実測図

口縁端部に沈線を一条、めぐらす。胴部外面はヘラナデ調整か？。胴部外面の屈曲部上位から炭化物を採取した。

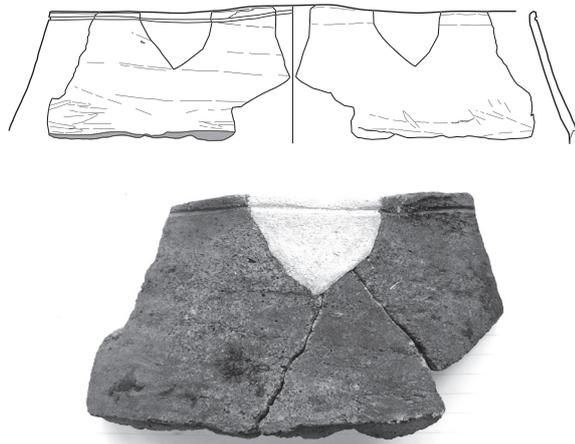
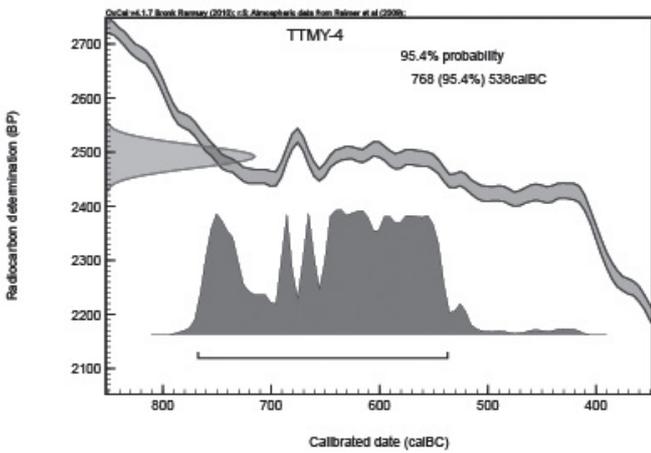
- ③ 埋土中層から出土した浅鉢である。胴部が「く」の字状に屈曲する（図2-③、図3-③）。②と同じく山陽地方の沢田式、山陰地方の古市河原田式に典型的な形態をしている。ナデ調整で仕上げる。屈曲部上位外面の炭化物を試料とした。
- ④ 埋土中層から出土した砲弾型で突帯の付かない甕である。口縁下に内外両面から孔が穿たれている（図2-④、図4-④）。外面は横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部外面下のススを試料とした。
- ⑤ 埋土上層から出土した土器で、口縁端部が外方向に張り出している（図2-⑤、図4-⑤）。無刻目突帯文土器の一類型で、甕と判定したが、鉢の可能性も否定できない。外面は横方向擦痕調整。つきだした口縁部の下に帯状に炭化物が付着していたので採取した。
- ⑥ 埋土上層から出土した土器である（図2-⑥、図4-⑥）。外面のヨコナデ調整が粗いことから、無刻目突帯文土器の一類型と考え、甕と判定したが、鉢の可能性も否定できない。胴部外面の炭化物を試料とした。
- ⑦ 埋土上層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である（図2-⑦、図5-⑦）。無刻目突帯を口縁部に接して貼り付ける。突帯の位置はいわゆる口唇端部からわずかに下るBである。外面を粗いナデ調整で仕上げる。口縁下外面の炭化物を資料とした。山陰では、無刻目突帯文土器は、板付I式や沢田式に併行する古市河原田式にも2割程度存在している。口縁部突帯の位置も、口縁端部から下がった、いわゆるAの位置に貼り付けるものもあって、バリエーションがみられる。古海遺跡の土器群にも無刻目突帯が2割程度伴う〔濱田2000〕。また第I-2様式の新相を示す遠賀川系土器とともに突帯文系土器が出土している目久美遺跡第5・6次調査などでは、突帯文甕の9割以上を無刻目突帯が占めており、口唇端部から突帯幅1つ分下ったAの位置に突帯を貼り付けるものの比率が高まっている。
- ⑧ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である（図2-⑧、図5-⑧a、⑧b）。口縁端部にほぼ接して突帯を貼り付け、大形で長楕円形の刻目をもつ。典型的な古海式の一類型である。口径と器高の割合はほぼ1:1で、それほど長胴ではない。外面に施された斜めのナデ調整はかなり粗雑である。遠賀川系土器の影響は認められず、見た目は晩期の突帯文土器である。口縁部外面（a）と胴部内面（b）の2ヶ所から炭化物を採取した。内外面の炭化物は見た目には似ている。つまりススとコゲほどの違いを認めることはできない。
- ⑨ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である（図2-⑨、図6-⑨）。口縁端部にほぼ接して突帯を貼り付け、小ぶりのO字状の刻目を間隔を空けて浅く刻む。胴部外面は斜め方向の粗いナデ調整で仕上げる。小さく浅い刻目はやや新しい傾向のようにも感じられるが、遠賀川系土器の影響は認められない。胴部外面中位の炭化物を採取した。
- ⑩ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である（図2-⑩、図6-⑩）。口縁端部に接して突帯を貼り付け、間隔を空けて楕円形の刻目が施されている。胴部外面は斜め方向の粗いナデ調整で仕上げられている。典型的な古海式の一類型である。遠賀川系土器の影響は認められない。胴部内面下位の炭化物を採取した。

-
- ⑪ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑪, 図6-⑪)。口縁端部がわずかに外湾する。口縁端部に接して突帯を貼り付け、大ぶりのヘラ刻目(D字)を少し間隔を空けながら深く刻む。胴部外面は粗いナデ調整で仕上げる。遠賀川系土器の影響は認められない。胴部外面中位の炭化物を採取した。
- ⑫ 埋土中・上層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑫, 図7-⑫)。口縁端部に接して突帯を貼り付け、小ぶりのヘラ刻目(幅狭のD字ないしはV字状)を間隔を空けて刻む。胴部外面は斜方向の粗いナデ調整で仕上げる。小ぶりの刻目はやや新しい傾向をのよように感じられるが、遠賀川系土器の影響は認められない。胴部外面に付着したカサブタ状の炭化物を採取した。
- ⑬ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑬, 図7-⑬)。口縁部がわずかに内湾しており、胴部最大径が胴部上位にある。口縁端部に接して突帯を貼り付け、口縁上面が平坦化する。V字状の細いヘラ刻目を間隔を空けて施されている。口縁上面が平坦化していることや刻目の雰囲気から新しい傾向にあるように感じられる。胴部外面は粗いナデ調整と細いヘラによるミガキ状の調整で丁寧に仕上げる。基本は古海式の製作技術によるが、他に比べて、口縁端部や調整には、遠賀川系土器の影響があるのかもしれない。突帯下の炭化物を採取した。
- ⑭ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑭, 図7-⑭)。口縁部がやや外反気味で、山陽側にみられる湾曲する一条突帯文甕の雰囲気が感じられる。口縁端部から少し下がったところに突帯を貼り付け、間隔を少し空けながら大ぶりの刻目がしっかりと施されている。胴部外面は縦方向の条痕調整が認められる。遠賀川系土器の影響は認められない。胴部外面の炭化物(スス)を採取した。
- ⑮ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑮, 図8-⑮)。口縁端部からしっかりと下がった位置に突帯を貼り付け、間隔を空けて小ぶりのヘラ刻目を間隔を浅く施している。胴部外面は比較的丁寧なナデ調整で仕上げられている。遠賀川系土器の影響は認められないが、刻目の感じは新しい傾向がある。胴部外面中位のカサブタ状の炭化物を採取した。
- ⑯ 埋土中層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑯, 図8-⑯)。口縁端部に接して突帯を貼り付け、間隔を空けて大ぶりのヘラ刻目をしっかりと刻む。内面の口唇部にも小さな刻目を施文する。胴部外面は横方向のナデ調整で仕上げる。遠賀川系土器の影響は認められない。胴部外面上位の炭化物を採取した。
- ⑰ 埋土上層から出土した砲弾型の一条突帯文甕である(図2-⑰, 図8-⑰)。口縁部が少し外反する。口縁端部に接して突帯を貼り付け、大ぶりの刻目を間隔を空けてしっかりと施している。胴部外面は粗いナデ調整で仕上げる。千代川の上流域にある智頭町枕田遺跡に多く認められる類型で、古海式の山間部型と考えている[濱田2008]。ただし、この個体については、外反する器形から、古海式よりも古い様相をとどめているようにも感じられる。遠賀川系土器の影響は認められない。突帯下の炭化物を採取した(濱田・藤尾)。
-

①8109



②8499



③8092

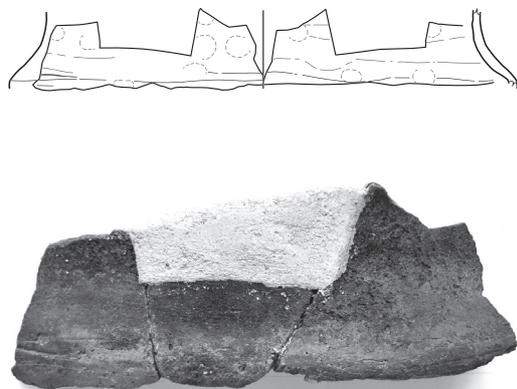
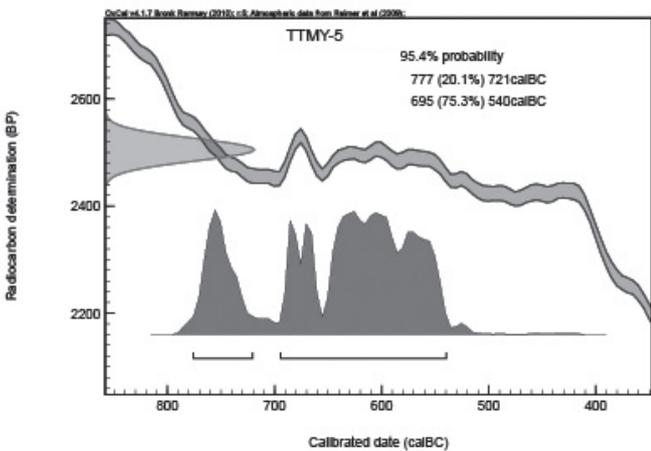
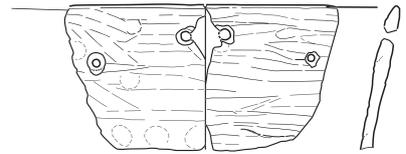
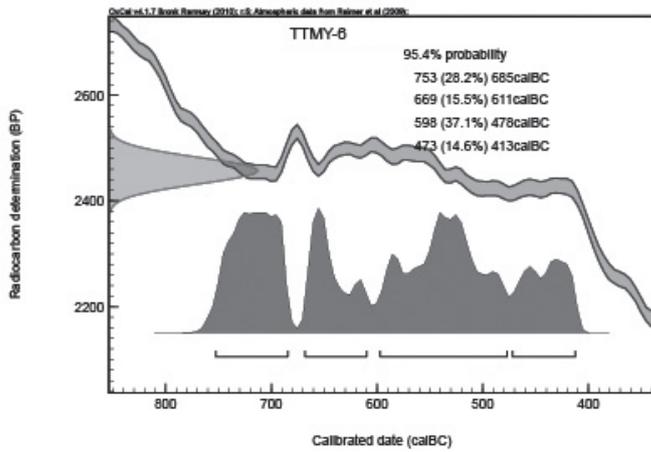
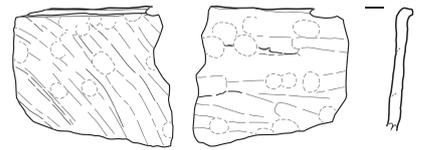
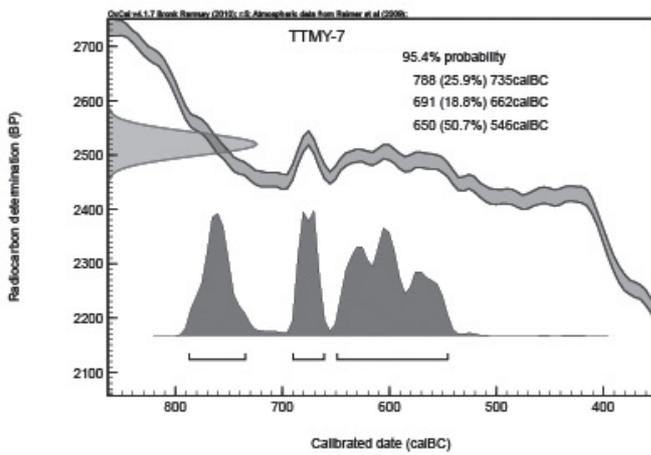


図3 較正年代と土器実測図 1

④ 8191



⑤ 7993



⑥ 8787

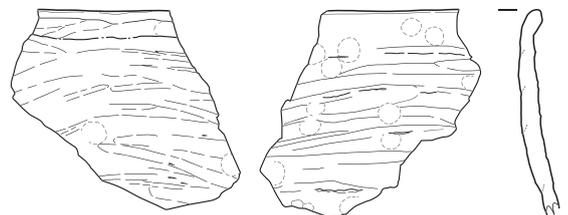
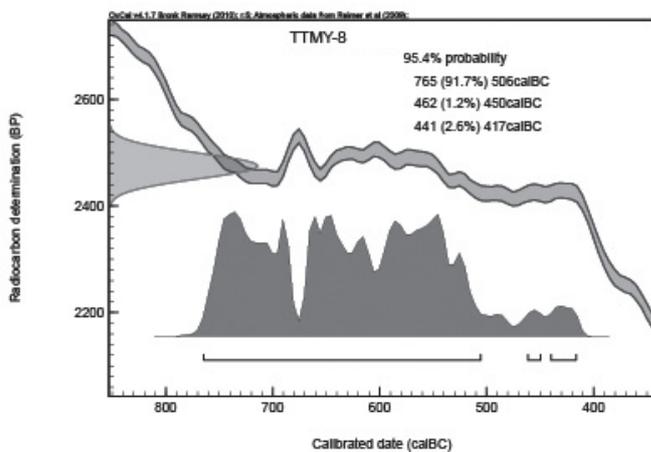
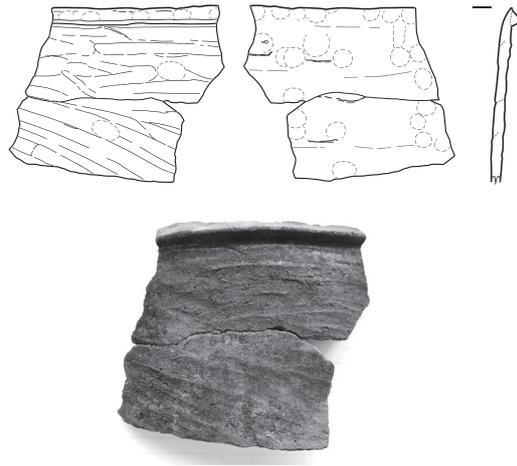
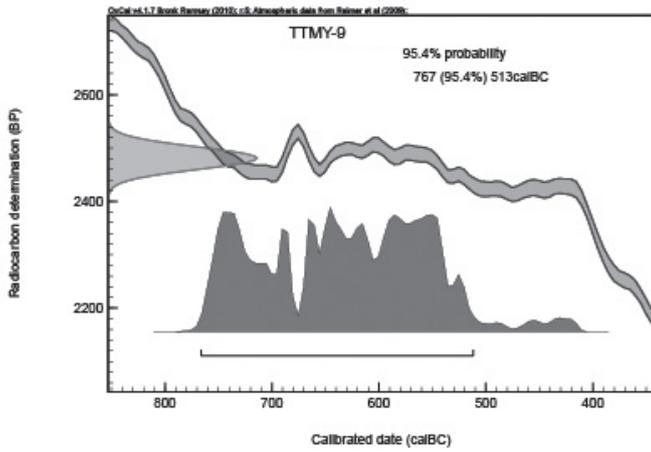
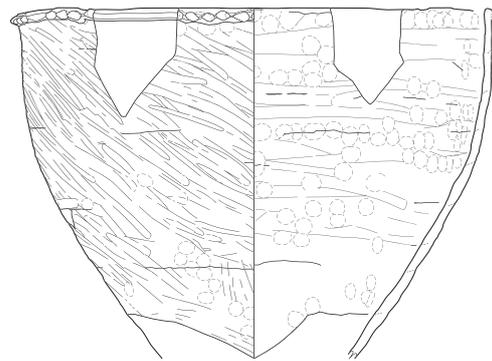
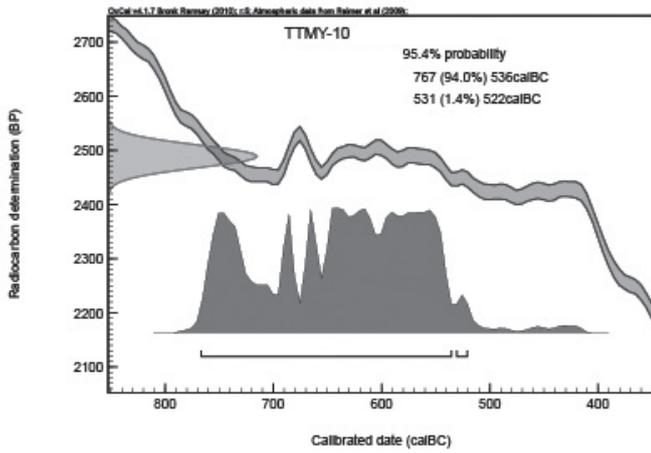


図4 較正年代と土器実測図2

⑦7824



⑧ a 8195



⑧ b 8195

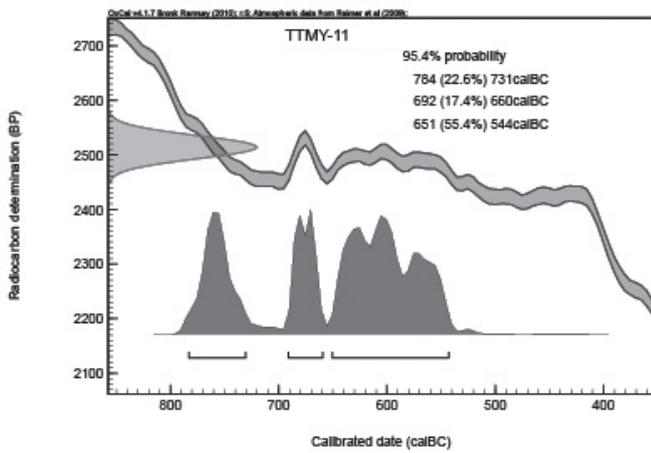
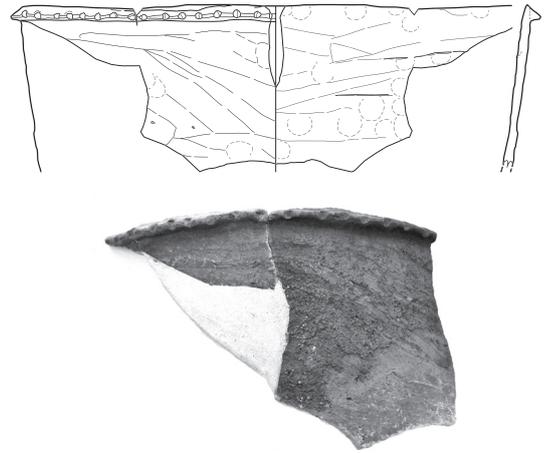
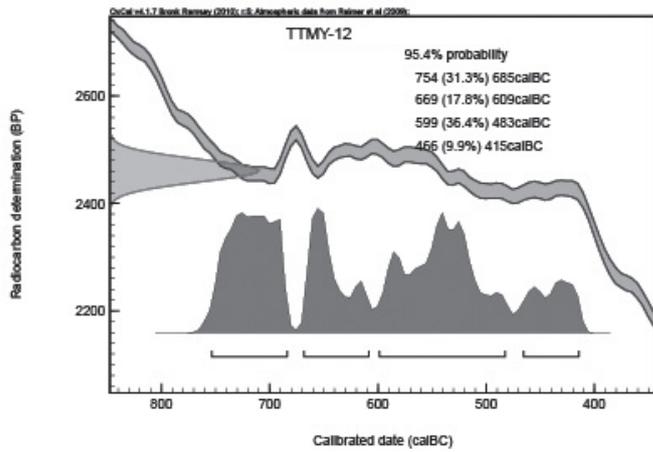
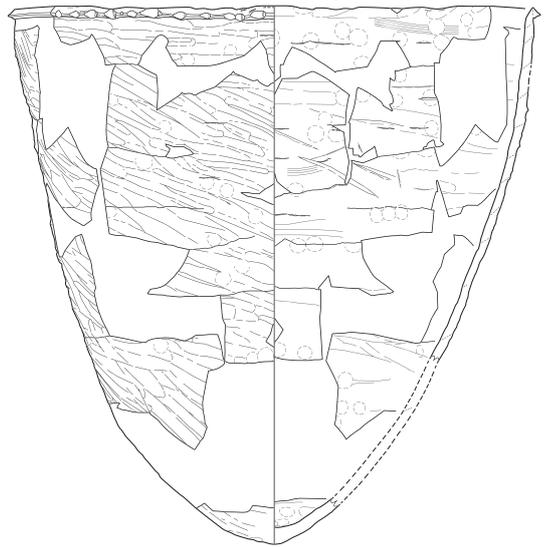
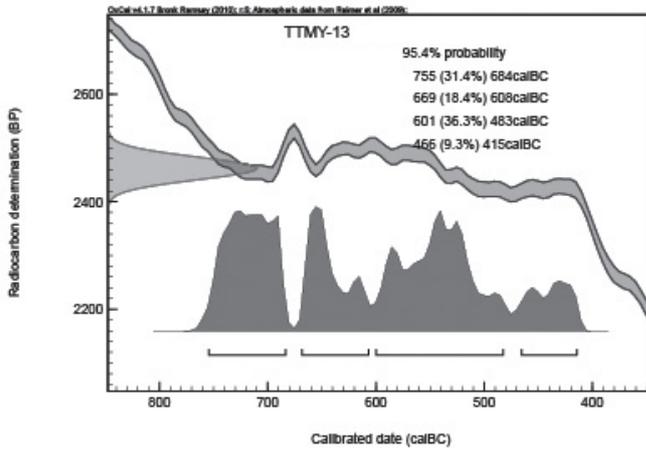


図5 較正年代と土器実測図3

⑨ 8120



⑩ 8542



⑪ 8231

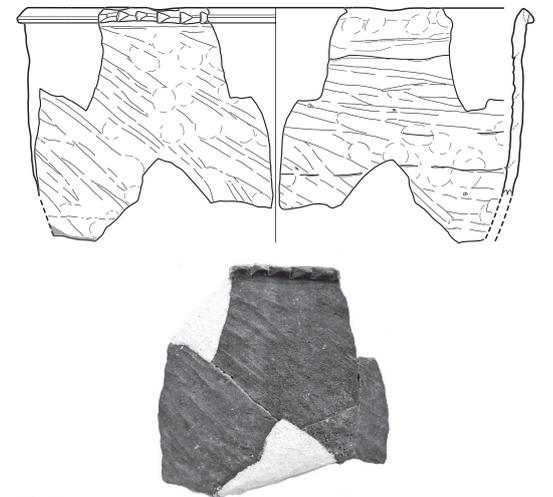
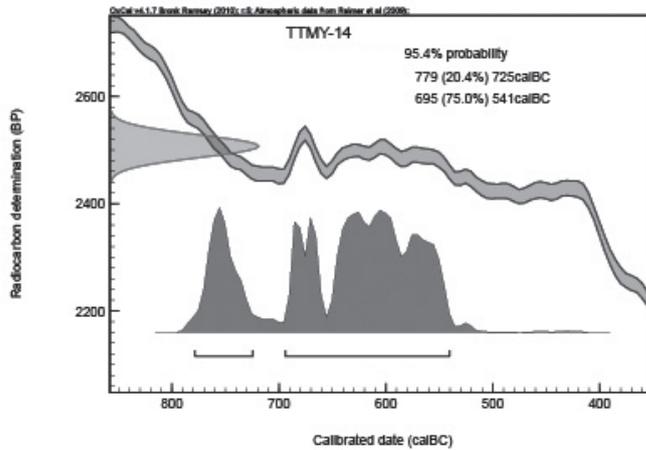
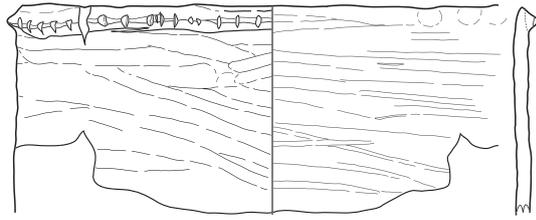
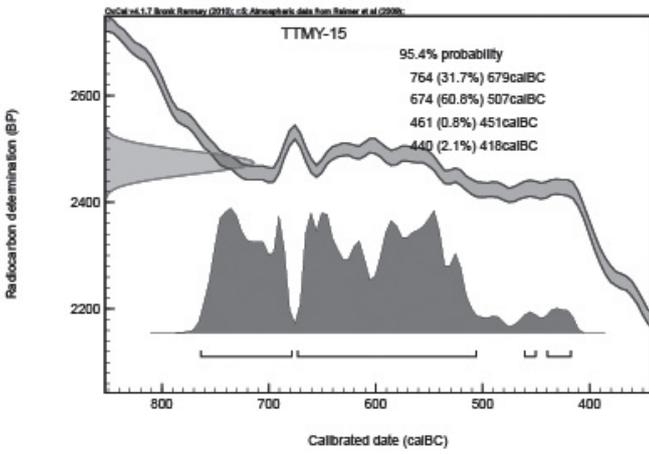
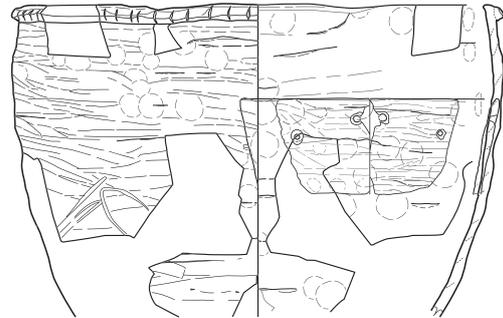
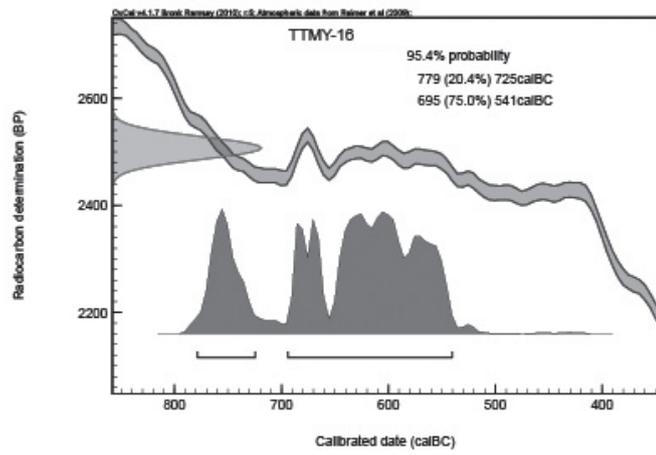


図6 較正年代と土器実測図 4

⑫8098



⑬8444



⑭8178

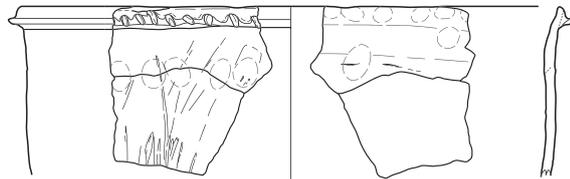
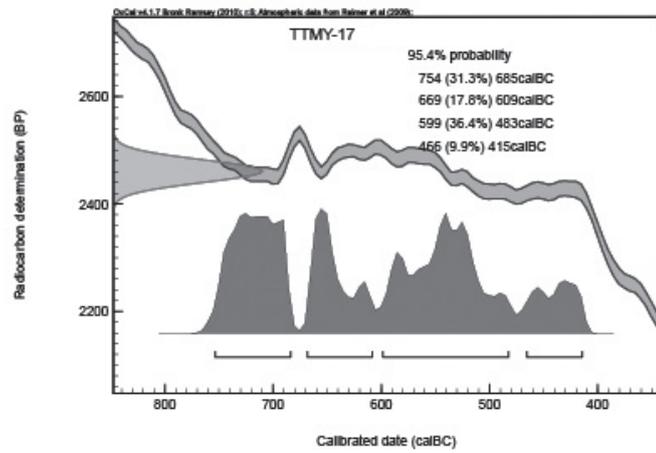
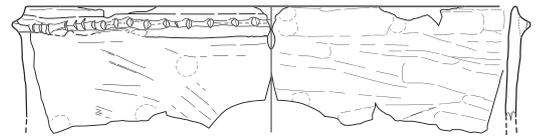
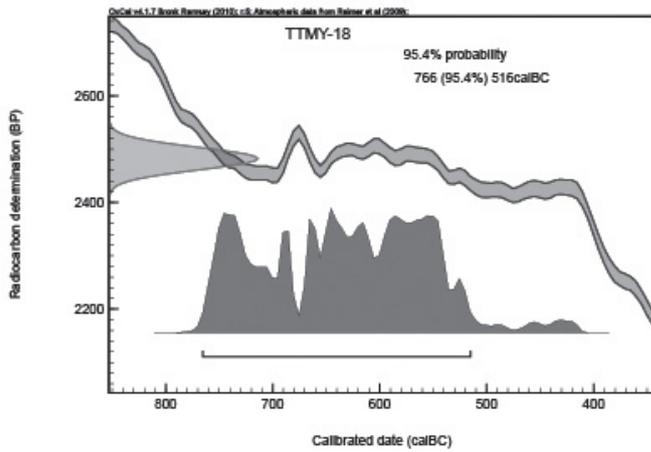
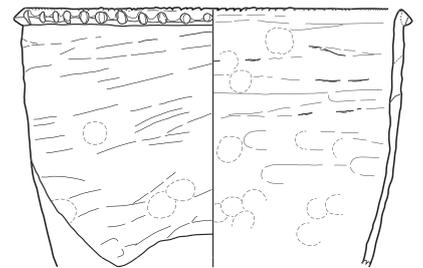
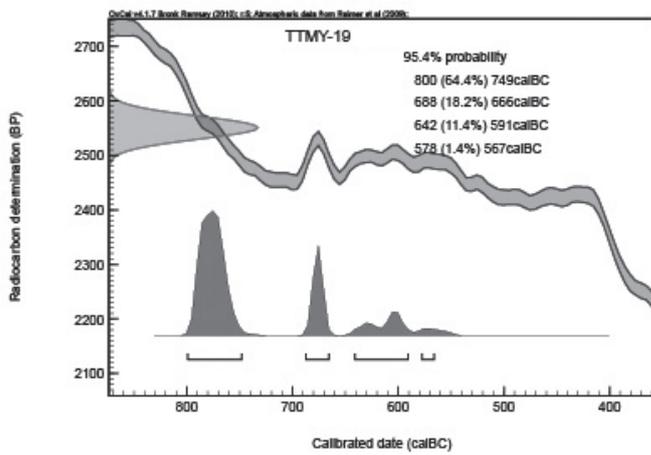


図7 較正年代と土器実測図5

⑮ 8425



⑯ 7770



⑰ 7566

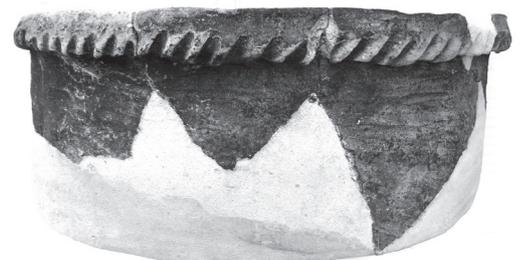
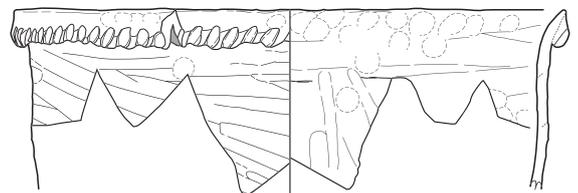
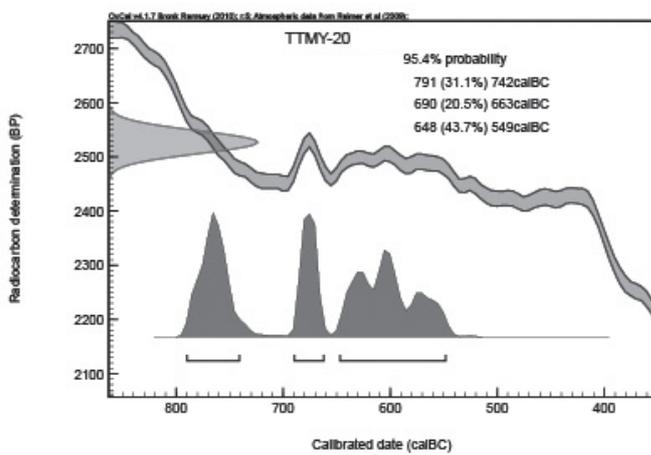


図8 較正年代と土器実測図 6

表 1 放射性炭素年代測定の結果

試料番号	資料番号	時期	土器型式	採取部位	測定機関番号	炭素 14 年代 (^{14}C BP)	較正年代 (cal BC)	確率密度 (%)	炭素同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)		
① TTMY-3	8109	弥生前期中頃	I-2 遠賀川系	胴部外面	PLD-19916	2460 ± 20	754-684	31.3	-26.57		
							668-610	17.1			
							598-482	36.4			
							466-415	10.6			
② TTMY-4	8499	晩期末	沢田式・鉢	胴部外面	PLD-19917	2490 ± 20	768-538	95.4	-26.92		
③ TTMY-5	8092						沢田式・鉢	胴部外面	PLD-19918	2505 ± 20	776-721
			695-540	75.3							
④ TTMY-6	8191		粗製深鉢	口縁部外面	PLD-19919	2455 ± 25	753-685	28.2	-27.02		
							668-610	15.5			
							598-478	37.1			
							472-413	14.6			
⑤ TTMY-7	7993		無刻目突帯文 土器・鉢	口縁部外面	PLD-19920	2520 ± 20	788-735	25.9	26.15		
							690-662	18.8			
							650-546	50.7			
⑥ TTMY-8	8787	無刻目突帯文 土器・鉢		口縁部外面	PLD-19921	2475 ± 25	765-506	91.7	-25.25		
							462-450	1.2			
							440-417	2.6			
⑦ TTMY-9	7824			無刻目突帯文 土器・鉢	口縁部外面	PLD-19922	2480 ± 20	766-512	95.4	-26.28	
⑧ a TTMY-10	8195				古海式	口縁部外面	PLD-19923	2490 ± 20	767-536	94.0	-25.93
									531-522	1.4	
⑧ b TTMY-101						口縁部内面	PLD-19924	2515 ± 20	784-731	22.6	-22.26
			692-660						17.4		
			651-544						55.4		
⑨ TTMY-12	8120		弥生前期中頃		古海式	胴部上位外面	PLD-19925	2460 ± 20	754-684	31.3	-27.15
		669-609							17.8		
		599-483							36.4		
		466-415							9.9		
⑩ TTMY-13	8542	晩期末	古海式	胴部下位内面	PLD-19926	2460 ± 20	755-684	31.4	-25.0		
							669-608	18.4			
							600-483	36.3			
							466-415	9.3			
⑪ TTMY-14	8231		古海式	胴部外面	PLD-19927	2505 ± 20	779-725	20.4	-25.99		
							694-541	75.0			

試料番号	資料番号	時期	土器型式	採取部位	測定機関番号	炭素 14 年代 (^{14}C BP)	較正年代 (cal BC)	確率密度 (%)	炭素同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)
⑫ TTMY-15	8098	弥生 前期 中頃	古海式	口縁部外面～ 胴部上位外面	PLD-19928	2475 ± 20	764-679	31.7	-26.64
							674-506	60.8	
							461-451	0.8	
							440-418	2.1	
⑬ TTMY-16	8444		古海式	口縁部外面	PLD-19929	2505 ± 20	779-725	20.4	-26.53
							694-541	75.0	
⑭ TTMY-17	8178	晩 期末	古海式	胴部外面	PLD-19930	2460 ± 20	754-684	31.3	-26.78
							669-609	17.8	
							599-483	36.4	
							466-415	9.9	
⑮ TTMY-18	8425	前 中	古海式	胴部外面	PLD-19930	2480 ± 20	766-516	95.4	-27.49
⑯ TTMY-19	7770	晩 期末	古海式	胴部上位外面	PLD-19932	2550 ± 20	800-748	64.4	-27.67
							688-666	18.2	
							642-591	11.4	
							578-566	1.4	
⑰ TTMY-20	7566		古海式	口縁部外面	PLD-19933	2525 ± 20	790-742	31.3	-27.60
							690-662	20.5	
							648-548	43.7	

IV 測定結果と較正年代

1 古海式の年代—炭素 14 年代値, 2500 ~ 2400 台の解釈—

測定結果は表1のとおりである。炭素 14 年代値は, 2500 台の測定値を示した③, ⑤, ⑧ b(内面), ⑪, ⑬, ⑯, ⑰と, いわゆる炭素 14 年代の 2400 年代問題に相当する 2400 台である。I 様式新段階(前期末)併行の炭素 14 年代値である 2300 台の測定値を示したものはなかった。

2500 台といえば基本的に板付 I 式の炭素 14 年代値である [藤尾 2009a]。鳥取平野には板付 I 式に併行する遠賀川系土器は確認できないが, 較正曲線を見ると(図 9), 板付 II a 式の存続期間である前 7 世紀～前 6 世紀前半にかけても 2500 台を示すところがある。板付 II a 式との併行関係が指摘されている古海式だけに, 2500 台を示す古海式の年代をこの間のどこかにくるとみてもよいだろう。また 2400 台は前 8 世紀中ごろ～前 5 世紀一杯までみられるが, やはり板付 II a 式と併行する古海式だけに, 前 7～前 6 世紀前半の間にはいるとみられる。

よって表 1 に示した試料の時期は基本的に板付 I 式(前期初頭)に後続する板付 II a 式(前期中頃)併行となる。もちろん, 水田稲作開始以前であれば縄文晩期文化段階にあったことはいうまでもないが, 西日本全体でみた場合には, 弥生前期併行という意味である。

2 古海式の細分

本遺跡から出土した土器を層位によって細分することはできないし、刻目突帯文土器は基本的に古海式の範疇に入っている。しかし刻目の大きさや刻む間隔、深さ、さらに器形によって古新の傾向を指摘することはできよう。また、無刻目の突帯文甕には、⑤と⑥のように古海遺跡出土の土器群には含まれていない類型がある。古海式が古新に大別できるとすれば、古海遺跡出土土器に含まれない類型（無刻目）の突帯文甕は、古海式の新相に振り分けが可能かも知れない。

一方、古海遺跡の土器群には遠賀川系土器は伴わないが、本高弓ノ木遺跡の土器群には少量の遠賀川系土器が伴う。こうした状況を考慮するならば、古海式は突帯文土器単純期と遠賀川系土器との共伴期に大別できよう。

もっとも本報告書にも掲載している福岡県小郡市大保横枕遺跡のように土器型式を使ったウィグルマッチ法〔藤尾 2007〕を適用できるわけではないので、本稿では濱田の分類案（沢田系浅鉢や遠賀川系土器との組み合わせ）をもとに、さらには藤尾が実施した愛媛県阿方遺跡の測定結果〔藤尾 2009a〕を参考にしながら本遺跡出土の古海式を古新の 2 時期に大別することにしよう。

1) 本高弓ノ木遺跡Ⅰ期

突帯文土器単純の段階である。甕は古海式の突帯文甕を主とし、②と③のような沢田系の浅鉢が残存する。古海遺跡からも古海式の突帯文甕に伴って、くの字に屈曲する沢田系の浅鉢が出土しており、この想定と矛盾しない。

また、沢田式に併行する古市河原田式以前の突帯文甕には、口縁端部から下がった位置にめぐる突帯に大ぶりでしっかりと刻目が施されており、口唇部に刻目を伴うものや、口縁部が外反する器形が認められる。本高弓ノ木遺跡の突帯文甕にも、古市河原田式以前の突帯文甕に散見される属性を備えた口縁部片が存在しているが、沢田系の浅鉢と同様に、それらも古い特徴を遺した甕が古海式に残存したものだろう。したがって、口縁部がわずかに外反し、突帯に刻目がしっかりと施されている⑪、⑰や、突帯が下がった位置にある⑭、口唇部に刻目が施された⑯などは、Ⅰ期に振り分けておく。

この他に、口縁部にほぼ接する位置に貼り付けられた突帯に横長の楕円形に施された刻目を伴う甕⑧や⑨は、遠賀川系土器を供伴しない古海遺跡で突帯文甕の主となる個体と近似した特徴を備えていることから、Ⅰ期に振り分けてしておきたい。

なお、沢田系の浅鉢や、古い属性を備えた突帯文甕を古海式に残存したものと判断するならば、本高弓ノ木遺跡Ⅰ期は板付Ⅰ式併行期まではさかのぼらない。また、本高弓ノ木遺跡Ⅱ期の土器と考える①などの遠賀川系土器が、板付Ⅱa式新相に併行する第Ⅰ-2様式新相の範疇にあることから、総合的に判断するとⅠ期については第Ⅰ-2様式の新相、板付Ⅱa式の新相との対応関係が想定できる。

2) 本高弓ノ木遺跡Ⅱ期

遠賀川系土器との共伴段階である。突帯に施される刻目は浅く小さいものが主体となる。第Ⅰ-2様式新相の遠賀川系土器と突帯文土器が出土している目久美遺跡第 5・6 次調査〔濱田編 1998〕や倉吉市イキス遺跡〔根鈴編 1988〕には沢田系の浅鉢はみられない。このことから、遠賀川系土器が供伴する段階には、沢田系の浅鉢が組成から失われていると考えてよい。

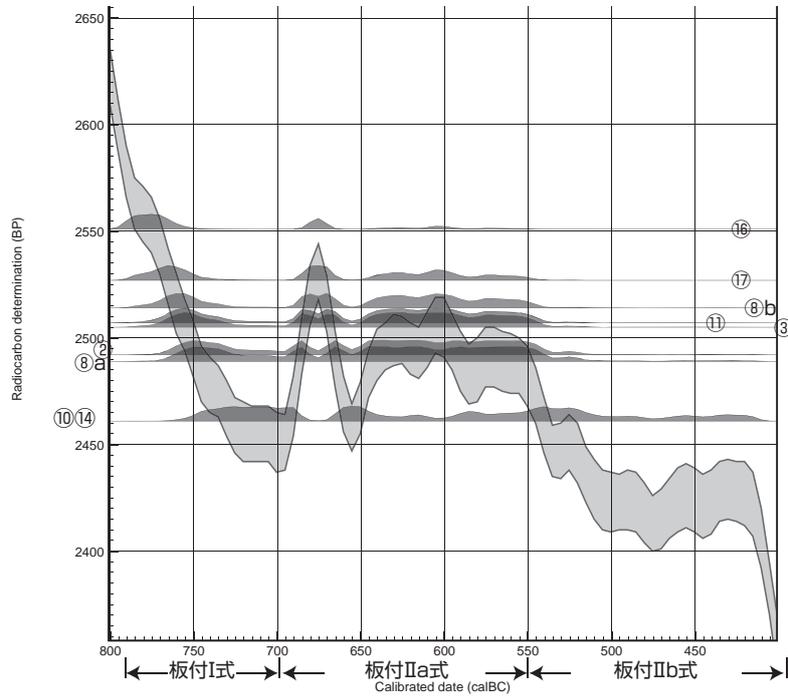


図9 本高弓ノ木遺跡Ⅰ期 古海式古相段階

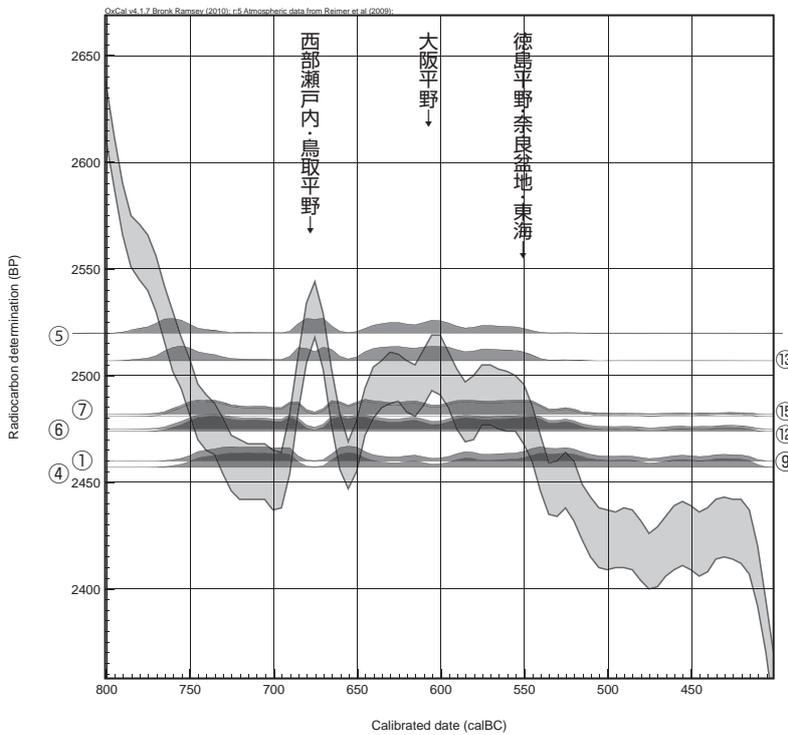


図10 本高弓ノ木遺跡Ⅱ期 古海式新相段階と西日本各地の弥生稲作開始時期Ⅱ期に伴うのが確実なのは①, ⑤, ⑥のみ【濱田】

なお、突帯の付かない粗製の甕や無刻目の突帯文甕はⅠ・Ⅱ期のいずれにも存在する。目久美遺跡第5・6次調査においても、遠賀川式土器や無刻目の突帯文甕とともに、突帯の付かない粗製の甕が出土している〔濱田編1998〕。また、鳥取県西部の状況を参考にすれば、突帯文甕における無刻目突帯の比率は、Ⅰ期からⅡ期かけて増加することが想定される〔濱田2000〕。

3) 細分案と炭素14年代との関係

以上、古海式を二分する仮説をもとに、本高弓ノ木遺跡出土土器をⅠ期とⅡ期に細別した。沢田系の浅鉢②と③、口縁端部に刻目のある⑬、突帯に横長の楕円形をした刻目などがしっかりと密な間隔で施されている⑧、⑩、⑪、⑭、⑰がⅠ期、遠賀川系土器である①、古海遺跡出土土器には認められない⑤や⑥がⅡ期の候補となる。その他の突帯文甕についてはⅡ期に位置づけられるものが多いと見込んでいるが、古海遺跡出土土器にも小ぶりの刻目を伴う突帯文甕は含まれており、すべてを一様にⅡ期とすることはできない。

濱田は、古相としたⅠ期の測定値に2500台が多く、新相としたⅡ期に2400台が多く見られることをもって、型式学的な分類と整合性をもつと考⁽¹⁾えている。しかし藤尾は、,、いわゆる2400年問題にあたっているため、2500台の方が2400台に比べて、暦年代が古いとは必ずしもいえるわけではないと考⁽¹⁾えている。

図9と図10は確率密度分布図を較正曲線上に配置したものである(坂本稔作成)。例えば図9の⑬だと、炭素14年代値の中心値が2550だが、板付Ⅰ式併行ではないので、前8世紀には落とせない。したがって前7～前6世紀のどこかに落ちることになる。口縁端部に接して貼り付けられた突帯、突帯にしっかりと深く刻まれた刻目、口唇部直接刻目という本高Ⅰ期の特徴をもつことからみても、前680年ごろを中心とする前7世紀の古い方にくる可能性がもっとも高いと考えられる。⑬のほかにも、②、③、⑧、⑩、⑪、⑭、⑯、⑰がⅠ期に該当する。

次に第Ⅱ期であるが、遠賀川系土器は山陰第Ⅰ-2式新段階で、板付Ⅱa式新相に併行するならば、その下限は板付Ⅱb式開始年代である前550年ごろとなり、前7～前6世紀のどこかにくる、ということになる。統計的にはこれ以上、絞り込めないで、前680～前550年の中間である前620～前600年ごろを仮の境として、Ⅰ期を前7世紀前葉～後葉、Ⅱ期を前7世紀末葉～前6世紀前半と考⁽¹⁾えておきたい。本期に確実に該当するのは、①、⑤、⑥であり、あとの④、⑦、⑨、⑫、⑬、⑮は本期に属するものが多いがすべてではないと濱田は考⁽¹⁾えている。

3 他地域との関係

濱田は、古海式について、縄文晩期末に中国地方の山陰側に展開する突帯文土器で、山陽側の沢田式に後出し、近畿の長原式に併行する〔濱田2008〕としているが、長原式に併行するならば、藤尾らの炭素14年代測定からみても、すでに福岡平野では板付Ⅰ式が成立しているため、古海式は弥生前期の突帯文土器、ということになる。しかも高知県田村遺跡の突帯文系土器のように弥生化しているわけではないので、縄文土器の様相を強く残す、弥生前期併行の突帯文土器ということになる。そこで問題になるのは、鳥取平野において遠賀川系土器がいつ出現するのか、そのことと古海式との関係である。

本高弓ノ木遺跡から出土した遠賀川系甕は、愛媛県阿方遺跡や広島市中山貝塚で出土する古式タ

表2 西日本の弥生前期における炭素14年代と土器型式

炭素14年代値 (¹⁴ C BP)	較正年代	福岡平野	阿方遺跡	岡山平野	鳥取平野	徳島平野	大阪平野
2500台	前780～700	板付Ⅰ式	沢田式新				船橋式
2500～2400台	前700～ 前7世紀末葉	板付Ⅱa式古相	中山Ⅰ式	津島Ⅰ式	沢田系・ 古海式古		長原式古
2500～2400台	前7世紀末葉～ 前550	板付Ⅱa式新相		津島Ⅱ式	古海式新・ Ⅰ古		長原式新・Ⅰ古
2500～2400台	前550～前380	板付Ⅱb式				庄・蔵本	
2300台	前380～	板付Ⅱc式					

イブ(板付Ⅱa式古相のもの)に後出するが、いずれも炭素14年代の2400年問題に相当するため炭素14年代の値に差はみられない。さらに沢田式との関係を見ると、阿方遺跡で出土した沢田式新と板付Ⅱa式古相タイプに併行する同遺跡出土の遠賀川系土器は共伴せずに時期差と考えられている。炭素14年代値をみると阿方の沢田式新(屈曲一条甕)は、2540～2460 ¹⁴C BPで、やはり本高弓ノ木の沢田系浅鉢や古海式の突帯文土器の値と変わらない。しかし阿方の沢田式新は波状口縁土器をもったり、定型化した口唇直接刻目をもっているなど、型式学的に古海式に先行すると藤尾は考える。よって沢田式新(阿方)→古海式古→古海式新と時期差となり型式学的に整理すると、表2のようになるであろう⁽²⁾。

V 本高弓ノ木遺跡の消長

2つに分けた時期にそって、本遺跡の消長を復原してみよう。

本高弓ノ木Ⅰ期 古海式の古い段階 晩期最終末 板付Ⅱa式古相併行

前7世紀前葉～後葉とした時期である。鳥取平野では近年、この頃に遠賀川系土器が出現している可能性が考えられるようになってきたが[濱田2012]、本遺跡では古海式主体の甕組成に沢田系の鉢や粗製深鉢が残存する段階である。突帯文土器の刻目はしっかりと大きめのものを深く、しっかりと大きめのものを深く、間隔を密に施文される傾向がある。同じく千代川左岸にある大角遺跡で第Ⅰ-Ⅱ期古相の範疇で理解される突帯文土器が確認されており[濱田2012, 山田2012]、鳥取平野における水田稲作の開始をこの頃に認定できる。

本高弓ノ木Ⅱ期 古海式の新しい段階 前期中ごろ併行 板付Ⅱa式新相・第Ⅰ-Ⅱ期様式新相併行 遠賀川系土器Ⅰ-Ⅱ期出現 本遺跡の弥生稲作の始まり

前7世紀末葉～前6世紀前半とした時期で、古海式の新相に遠賀川系がわずかに伴う段階で、遠賀川系土器が出現する。沢田系の鉢や粗製深鉢はすでに姿を消している。突帯文土器の刻目は小ぶりで浅く、間隔を広げて施文する。⑬のように口縁上面が平坦化するものも現れる。古河内潟周辺でいうと、長原式新・Ⅰ古共伴期である[藤尾2009b]。この頃、鳥取平野で本格的な水田稲作を行う集団が顕在化すると考えた。なお、徳島平野で弥生稲作が始まるのはもう一段階遅れる前6世紀中頃である[藤尾ほか2010](濱田・藤尾)。

VI 考察

図 11 はこれまでの見解を 1 枚の図にまとめたものである (藤尾)。

1 鳥取平野における水田稲作の開始年代

年代測定の結果, 本遺跡で遠賀川系土器が出現するのは前 600 年前後(前 7 世紀末葉～前 6 世紀前半)のいずれかという結果であった。なお濱田はもう一段階早い, 本高弓ノ木 I 期には鳥取平野で本格的な水田稲作が始まっている可能性が高いと考えている。その時期の遠賀川系土器の炭素 14 年代を測定して認められればの話だが, 濱田の考えにしたがえば鳥取平野の弥生稲作は西部・中部瀬戸内や山陰西部と同時に始まることになり, 大阪湾沿岸以西の近畿よりも 1 段階古く, 徳島, 奈良盆地, 名古屋近辺に比べると 2 段階早いことになる。

2 生業

コメ以外の雑穀などの存在もレプリカ法によって確認されているが, コゲの $\delta^{13}\text{C}$ の値からは, その存在をうかがい知ることはできない。食べていないはずはないので, もともとコメ主体の食事内容だったから測定値上にあらわれないのか, 別の理由なのかは判断できない。

3 弥生前期の突帯文土器

遠賀川系土器が出現しても, 弥生化しない突帯文土器が甕組成の主体を占める遺跡は, 九州南部や島原半島と長原式にも認めることができた。本遺跡における遠賀川系甕と突帯文土器の比率は, がどのくらいなのかを知りたいところである。遠賀川系土器が伴うとはいっても, 数%の存在であったなら, 選択的な水田稲作にまだ特化していないことが, 弥生化しない突帯文土器を使い続けることと関係している可能性がある。

4 縄文晩期の突帯文土器

沢田式系の浅鉢が残存する古海式古段階を前 7 世紀前葉とすると, 沢田式新段階は前 8 世紀ということになり板付 I 式併行であることを意味する。沢田式の先行型式である岡大農学部校内の炭素 14 年代が 2500 年代であることも矛盾がない。岡山の研究者は農学部校内出土の土器を夜白 I 式併行と主張しているが, 炭素 14 年代値からはそこまで古くあげることはできず, 夜白 II a 式併行とみるのが妥当である [藤尾 2009a]。

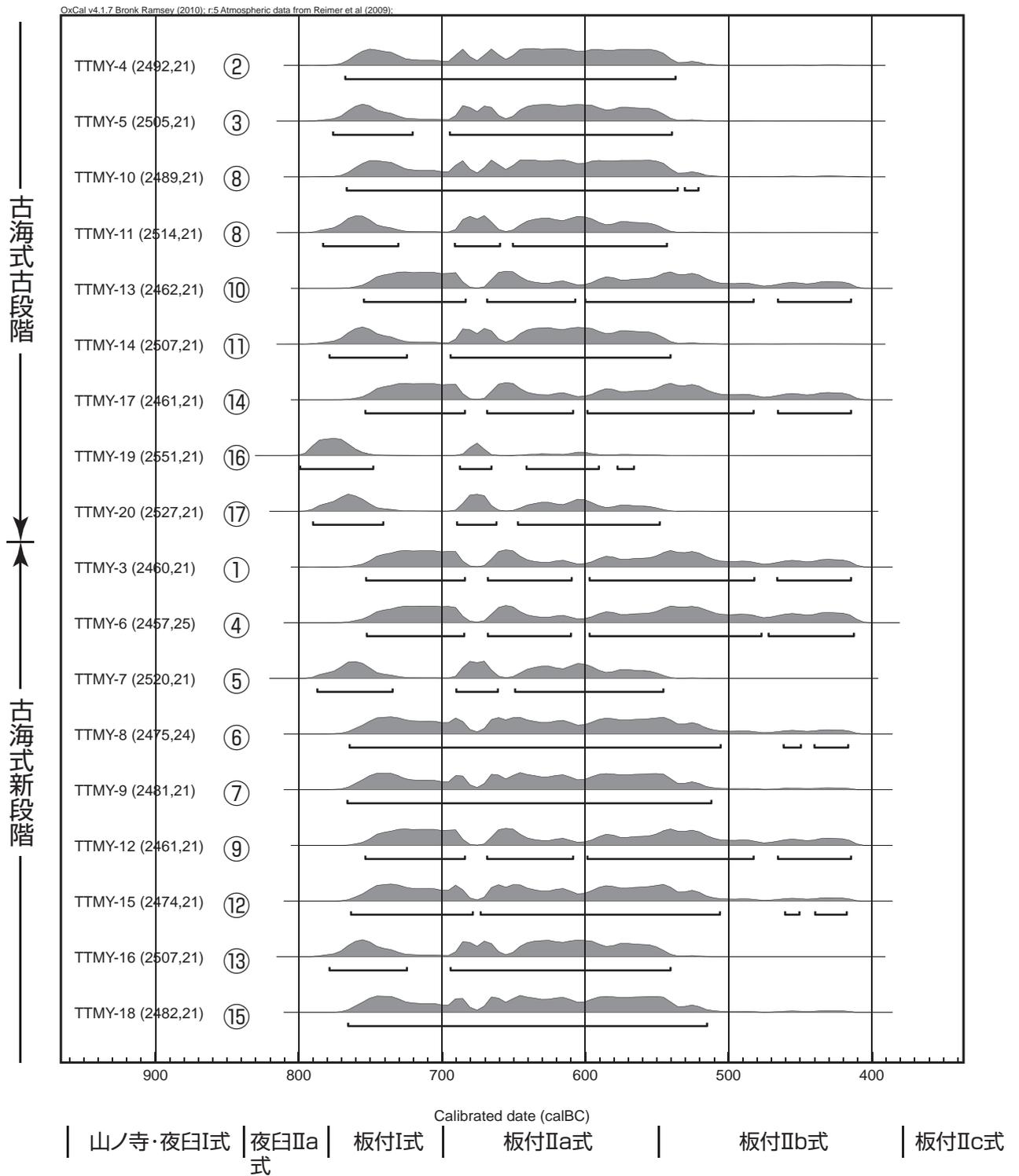


図11 古海式古段階と新段階の確立密度分布図
④, ⑦, ⑨, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮が新段階に位置づけられる可能性は高いが、すべてではない。

註

(1)——測定資料の炭素 14 年代は、⑩の 2550 が最も古く、④の 2455 が最も新しい。その中で、I 期と考えられる土器には相対的に 2500 台を示すものが多いが、⑩や⑭のように 2400 台を示すものもある。一方、II 期と考えられる遠賀川系土器の①は 2400 台を示すが、無刻目突帯文甕と考えた④と⑤については、④が 2400 台、⑤が 2500 台を示している。また、型式学的には、どちらに帰属させるべきか判断しなかった土器については、⑬を除いて、2400 台を示している。

したがって、測定された炭素年代は土器の型式学的な検討結果と概ね相関した数値を示しているようにもみえ

る。もちろん 2400 年問題で較正年代が絞り込めない資料が多く、このことをそのまま評価することはできない。ただし、本高弓ノ木遺跡の刻目突帯文甕については、2500 台と 2400 台を示す土器のうち、口縁部が外反する器形を残し、刻目がしっかりと密に施されたものが古相、炭素 14 年代が 2400 台で、完全な砲弾型を呈し、小ぶりな刻目が浅く、割と間隔を空けて施されるものを新相という規準で大別することも可能である。

(2)——しかし濱田は、古海式に伴う沢田系の浅鉢の時期を、阿方遺跡で出土した沢田式新と併行するとみているので、藤尾とは編年観を異にしている。

参考文献

- 根鈴輝雄編 1988『イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 56 集
 濱田竜彦 2000「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」(『突帯文と遠賀川』 pp.349-378)
 濱田竜彦 2008「中国地方東部の凸帯文土器」(『古代文化』60-3, pp.83-98)
 濱田竜彦 2012「出雲原山式土器再考—山陰地方の初期遠賀川式土器—」(『兎原 II—森岡秀人さん還暦記念論集—』, pp.127-140)
 濱田竜彦編 1998『目久美遺跡 V・VI』財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書 25
 濱田竜彦・中尾智行・下江健太・山梨千晶 2012「本高弓ノ木遺跡の発掘調査について」(『日本考古学』第 33 号, pp.123-138)
 平川 誠 1981『古海遺跡発掘調査概報告』鳥取市文化財報告書 IX
 藤尾慎一郎 2007「土器型式を用いたウィグルマッチ法の試み」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集, pp.157-184)
 藤尾慎一郎 2009a「弥生時代の実年代」(『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代の始まり第 4 巻, pp.9-54, 雄山閣)
 藤尾慎一郎 2009b「弥生開始期の集団関係—古河内湯沿岸の場合—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 152 集, pp.37-400)
 藤尾慎一郎・坂本 稔・住田雅和 2010「徳島市庄・蔵本遺跡群出土炭化物の年代学的調査」(『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2』 pp.53-60)
 松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」(『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 pp.413-482)
 山田真宏 2012「大柵遺跡—県道鳥取河原線(嶋工区)道路改良事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書—」

藤尾慎一郎 (国立歴史民俗博物館研究部)

濱田竜彦 (鳥取県教育文化財団)

坂本 稔 (国立歴史民俗博物館研究部)

(2012 年 12 月 7 日受付, 2013 年 1 月 25 日審査終了)